

ということである。阿須賀神社の「阿」は接頭語で「須賀」は先に述べてきた「スカ」即ち「州処」の意で、河口に堆積された砂州・砂嘴を意味している。熊野阿須賀神社は、熊野川の河口閉塞を元にもどし、河口の健全な機能を守る神だったのである。『万葉集』に登場する「スカ」という普通名詞は、現在も各地で普通名詞として使われ、それがまた、時

に、地名・神社名のように固有名詞化して生きているのであった。

民俗をたどり、確かめることによって古語の意味が明らかになり、実感を増すことがある。一方、民俗・民俗語彙に古語を照応させることによって民俗の古さや源流を確かめることもできる。今後も民俗と古語の相互照射を続けてゆきたい。

## Memories of Southampton

理工学部経営工学科

講師 前田節雄

私は、近畿大学から平成3年4月1日から平成4年3月31日の1年間、好運にも英国サウサンプトン大学へ留学の機会が与えられました。好運の一つは、留学が出来たこと、もう一つはサウサンプトン大学へ留学できたことでもあります。と言いますのは、留学の話が出て、経営工学科の第一候補に私が決まったのが確か平成2年の5月中頃だったと記憶しています。それまで留学は第三者のことでまさか自分自身に回って来ることはないと思って、留学先等については何も考えておらず、9月末頃までに行き先を決定して提出しなければならなくなり焦りました。ただ、「振動の人体への影響の研究」をするのならサウサンプトン大学音響振動研究所人間工学研究部のグリフィン教授の元で研究が出来ればいなど以前から思っておりましたので、急遽、グ

リフィン教授へ、近畿大学から1年間留学の機会が与えられた事と、グリフィン教授の提案されている式と私の提案している式との相違点について研究したいとの内容の手紙を出したのが6月初旬だったと思います。グリフィン教授から返事をいただいたのが6月末頃。この返事がいただけるまでの数週間の長く感じたことは今でも忘れられません。「共同研究をやりましょう」との内容の手紙の嬉しかったことは言葉に出来ません。顔も知らない、ただ、論文でよく名前を見た、そして、振動の研究では世界で最も知名度のある教授から共同研究を承諾されたのですから。それから、数回の手紙やFAXのやり取りがあり、平成3年4月1日に、胸いっぱい不安を持って家族3人で大阪空港をあとにしました。

非常に親切な教授で、サウサンプトンでの宿泊先も手配していただき、私がホテルへ到着した夜に電話をいただき、翌日には、教授の車でホテルまで迎えに来ていただきました。初対面のグリフィン教授は非常に感じのいい、英国紳士という感じの人で第一印象が非常に良く、この人となら一緒に研究をやって行くことが出来ると思いました。(図1参照；この写真は1991年5月28日にグリフィン教授の家に招待された時のグリフィン教授家族とオフィスで同室だったネルソン君の奥さんのシポーヌ(右端)と私の家族)ただ、写真のグリフィン教授はどう思われたかどうかはわかりませんが。

この日から、長くて短かった英国での生活がスタートしました。大学の研究室へ案内され秘書の女性や他の研究者に紹介されたり、日本語のない世界で、ぐったり疲れた1日でありました。それからの数日間は、警察への登録、大使館への在留届の提出、借家探し、車の購入、小学生の子供の現地小学校への入学手続き、ロンドンの日本語の補習校への入

学手続き、そして、最も大切な研究の打ち合わせと、非常に忙しい数週間でありました。私と、妻と、子供のそれぞれの生活が順調に始まったのは5月上旬頃からだったと思います。ここでは、家族3人が利用しましたサウサンプトンの図書館について書かせて頂きたいと思います。

私が留学しましたサウサンプトン大学は図2に示しますようなキャンパスで、英国での大学の平均学生数が4000人であるのに対して



図1 グリフィン教授家族と筆者の家族

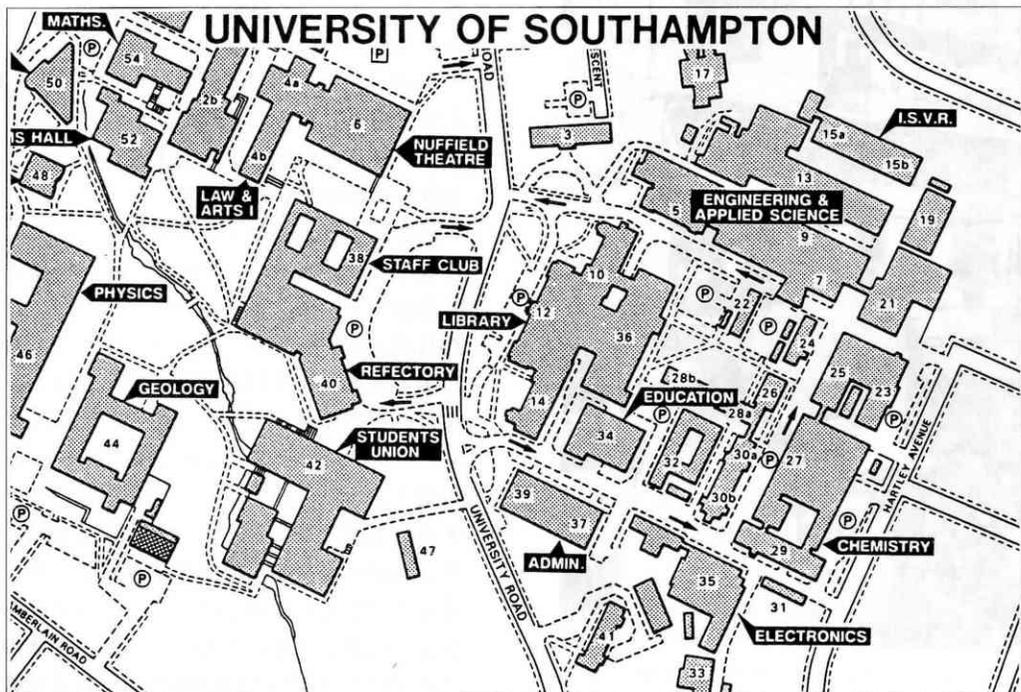


図2 サウサンプトン大学キャンパス

約7000人という、英国では大きい大学であります。私は図2のNo.13、15の音響振動研究所にて1年間実験等を行いました。この音響振動研究所(ISVR)の組織は図3に示しますように、5つの研究グループと2つのコンサルタントユニットから出来ております。私が

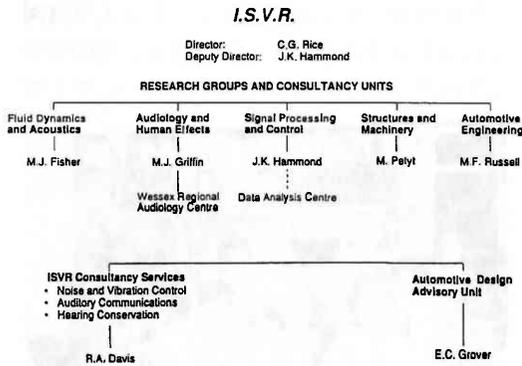


図3 サウサンプトン大学音響振動研究所 (I. S. V. R.) 組織



図4 人間工学研究部 ライブラリアンのジャッキー (左) とジョン (右)

所属しましたのはグリフィン教授の率いる「Audiology and Human Effects」グループの中の Human Factors Research Unit であります。このユニットは21人の研究スタッフで構成され、15人が振動の人体への影響の研究を行う研究者、3人が研究実験の装置等の設計・製作・準備を行う技術者、そして、秘書と図4の写真の2人のライブラリアンのジャッキー (左) とジョン (右) であります。このユニットには独自の図書室があり、振動の人体への影響の研究に関する論文が約8000本が整理されており、いつでも、見て必要なものはコピーすることができます。私にとりましては、非常に便利で読みたいと思うものはほとんど探すことが出来ました。手元に、論文が揃っていることのありがたさを痛感いたしました。ただ、ここで見つからないものや、図書等に付いては、図書のプロのジョンに依頼するとISVRの図書室か図5、図6に示しますハートレイ図書館へ手配してくれ、そこがない場合は外部へ依頼してくれましたので、文献の入手等に関しては何等苦勞することはありませんでした。ハートレイ図書館は、サウサンプトン大学のほぼ中心部にあり、図5の写真にありますように非常に重厚な造りの建物で、1階のフロアーには、喫茶室があり、私も妻とよくコーヒーを飲んだ事を思い出します。

最後に子供と妻がよく利用しました市立図書館について書かせて頂きたいと思います。名前はバージェスロードライブラリーで、私たち外国人でもグリーンカードを見せて登録しますと本などを自由に貸してくれます。本などと書きましたのは、子供は、本以外におもちゃを3週間おきに2種類の物を自由に借用でき、妻は、ジグソーパズル等を借りたりすることができます。また、この図書館、いや、英国の図書館全部かも知れませんが、夏休みに子供たちに本を読ませるようにかもしれませんが、4冊の本を借りて読み返却の時に各本に用意された質問に答えられると賞が与えられるというものであります。私の子供



図5 サウサンプトン大学ハートレイ図書館

も記念にと参加し、何とか質問に答えることが出来、その時に、図7のような招待状をもらうことが出来ました。1991年9月28日に図書館へ行き、図8、9に示しますようにサウサンプトン市の市長から一人ずつ図10に示します表彰状を受け取ることが出来ました。子

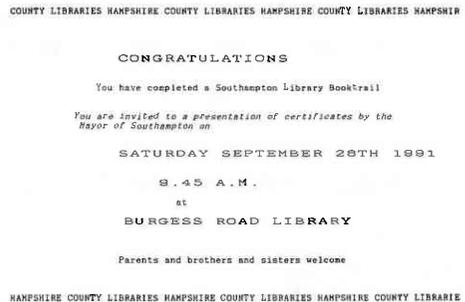


図7 招待状

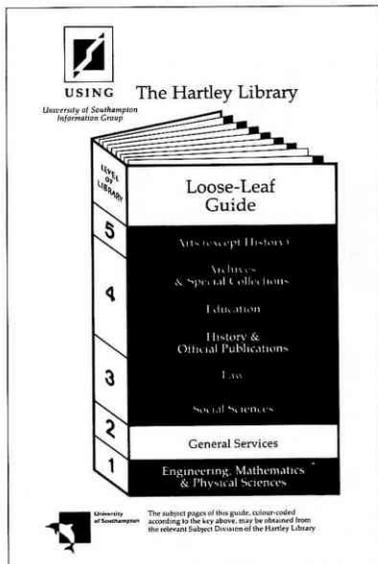


図6 ハートレイ図書館利用案内



図8 サウサンプトン市長から表彰される息子



図9 サウサンプトン市長と息子

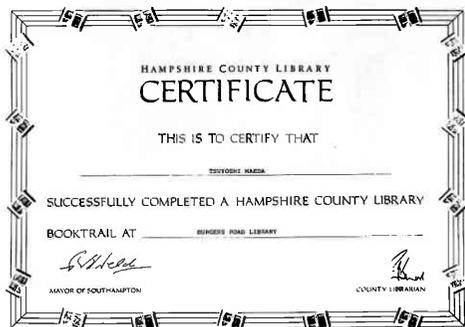


図10 表彰状

供にとりましてもいい記念になったことだと思えます。

このように、親子3人、サウサンプトンにて一年間生活し、それぞれがよい経験をする事ができました。このような機会を与えて下さいました近畿大学および経営工学科の各位および共同研究のために私を快く受け入れて下さいましたグリフィン教授に感謝致します。

また、私事ですが、今年も、9月の1ヶ月間、あの整備された図書室のありますサウサンプトン大学音響振動研究所人間工学部のグリフィン教授の元へ共同研究と学会発表のため出張いたします。いろんなノウハウを吸収し今後の教育・研究に役立てていきたいと考えております。

これにて、留学時に利用しましたサウサンプトンでの図書館の思い出に付いての筆をおかせていただきます。

和歌山市立博物館 秋季特別展「近世日本医学と華岡青洲」に出品の本館所蔵品の一部

